

P2-33.**子宮頸部におけるヒトパピローマウイルス mRNA テストの有用性の検証**

(社会人大学院 4年 分子病理学)

○中山 ゆみ

(分子病理学)

山田 正俊、黒田 雅彦

(産科婦人科学)

井坂 恵一

子宮頸癌及びその前駆病変の発症には、高リスク型ヒトパピローマウイルス (HPV) が深く関与している。子宮頸部病変の検出には、従来から擦過細胞診が中心であったが、近年では HPV の DNA テストの併用により病変の検出率が向上している。一方、HPV DNA テストは特異性の低さが指摘され、欧米では代替手段として HPV mRNA テストが導入され始めている。今回、HPV mRNA 検出キットを用い、HPV の検出、および有病変における感度、特異度の検証を、HPV DNA テストを対照として行った。

【方法】 子宮頸癌検診にて検査を行った 410 例を対象とした。ベセスダ分類に基づく細胞診断に加え、HPV mRNA テスト試薬である APTIMA HPV Assay[®] (以下 APTIMA)、および HPV DNA テスト試薬の Hybrid Capture2[®] HPV DNA Test (以下 HC2)、AMPLICOR[®] HPV Test (以下 AMPLICOR) による HPV 検出テストを行った。

【結果】 対象者全体の HPV 感染に対する感度/特異度は APTIMA 85.6%/99.2%、HC2 94.1%/98.4%、AMPLICOR 90.2%/95.7% で、感度に関しては HC2 がやや有意に高かったものの、いずれの検査も良好な結果を示した。一方、細胞診にて SIL 以上を指摘された群に関しては、APTIMA、HC2、AMPLICOR の感度/特異度に関しては、それぞれ 91.2%/84.2%、94.5%/80.4%、87.9%/78.2% であり、特異度に関して APTIMA の優位性 ($p < 0.05$) が示された。

【考察】 子宮頸部検査における HPV DNA テストの併用は、病変の高検出率をもたらす一方で、そのコスト面から特異性の向上が望まれる。本研究の結果から、本邦においても HPV mRNA テストが HPV DNA テストにとって代わる検査手段になり得ることが示唆された。

P2-34.**上顎洞癌の供血血管：動注化学療法時の血管造影下 CT からの検討**

(社会人大学院 3年 放射線医学)

○勇内山大介

(放射線医学)

齋藤 和博、大高 純、舟津 智一

佐口 徹、赤田 壮市、徳植 公一

(耳鼻咽喉科学)

清水 颯、鈴木 衛

【目的】 経カテーテルの動注化学放射線療法(以下、動注療法)を施行した際の selective CT angiography (SCTA) を retrospective に検討し局所進行扁平上皮癌 (LAMSCC) の血流支配を明らかにする。

【方法と対象】 対象は LAMSCC にて動注療法を行った患者 17 例 (男性:女性=12:5)、平均年齢 61.2 歳 (40-86)、T 因子は T3:T4a:T4b=6:6:5、いずれも N0 である。上顎洞前壁、内側壁、外側壁、上壁、下壁および側頭突起への浸潤は、14、15、11、12、12、6 例に認められた。翼口蓋窩への浸潤は 7 例、上咽頭への浸潤は 2 例、中頭蓋底への浸潤は 1 例、眼窩への浸潤は 12 例で認められた。

【結果】 顎動脈の 3rd portion の分枝を選択的に動注した症例は認められなかった。3rd portion からの SCTA は 9 例、2nd portion からは 8 例に施行され、主に上顎洞の内側壁、外側壁、上壁、下壁を占拠する部位に造影効果が認められた。前壁に浸潤した 14 例のうち、13 例で顔面動脈からも供血が認められた。翼突筋や咀嚼筋間隙に腫瘍が浸潤する場合、2nd portion からの SCTA によって腫瘍全体の造影効果が認められた。これは翼突筋動脈、前深側頭動脈からの供血のためであった。側頭突起に浸潤した症例は、全例で顔面横動脈からの供血が認められた。軟口蓋に浸潤した 2 例で上行口蓋動脈からの供血が認められた。また、眼窩への浸潤が認められた症例のほとんどで眼窩下動脈から、眼窩浸潤部への供血が確認された。眼窩から篩骨洞へ浸潤の認められた 1 例で眼動脈からの SCTA によって腫瘍濃染が得られた。

【結論】 腫瘍の進展範囲により栄養血管の推測はある程度可能と考えられる。